



銀座コロソハン本店

コロソハンと共に

— 6 —

“Ding, ding, c'est la cloche du matin”と、清楚な朝の空気を動かす白百合幼稚園の窓から流れる歌声。

道成寺の唄の文句じゃないけれど、八鐘にうらみは数々御座る——とばかり、一九五九年は、皇太子様にあやかるとウエディング・ベルに、華やかに階段を上る人、下る人、上りそこねる人、等々。そして、鐘、鐘、鐘は鳴り響く。

東京も市の時代より六十余の星霜を、余韻深き鐘の音と共に過ぎて来た私。幼ない頃きいた、懐かしい浅草弁天山の時の鐘は、下町の庶民の味わい、そして、夕べの森に佇し、長く尾をひく上野寛永寺の鐘の音は、山に遊ぶ子供等の小さな背に「早くお帰りと優しく響く。そして、美しく森を包む夕暮れの足音を思わせたものだった。

昔の鐘の音が陰なら、今の鐘は陽。鐘に明け、鐘に暮れるのだろうか？ 浅草の鐘の音から、今の演劇文化が東京中へ静かに流れて行った。

隅田川ならで、宮戸川の宮戸座は幾多の歌舞伎名優を産み出し、金竜館からは賑やかに「シラノ」「カルメン」等の歌劇で、音楽劇の良さを大衆の生活に織り込んでいった。

浅草が動なら上野は静。文展、院展と芸術の登竜門の中へ女流画家の進出が目覚しく、女性特有の美しい画の線の魅力に、その頃年頃だった私は、すっかり刺激されて、女

流画家にも大いに憧れたものだった。浅草公園を抜けた左り手の鴨下写真館のウインドウに「山本千代」さんの抜けるような美しい写真が飾られていた頃の事。ベビー・プリームの騒がれている今日だが、当時の小学生は丁度日清戦争の時胎内にて、戦争直後に生れたため、同年の子供が全国的に少い現象をうみ出していた。そして続いておきた日露戦争に、私達は完全に明治の御代の戦争っ子だった。旅順陥落の報に湧き立つ東京の町に、鈴を鳴らした新聞社の号外が喜びのサービスとばかりに、まるで空から降らすようにまいたものだ。今の宣伝ビラなど及びもつかぬ程の数量で、子供の私ですら地面にこびりついたような号外から「旅順陥落」の難かしい漢字を覚えた位だった。

下町の進歩的な浅草小学校で過した私と、仲の良い三人の友達、金竜館のオペラや上野の森から受けた文化的な刺激で、すっかり外国に憧れてしまった。戦争に明け暮れた日々を思い、戦争のない美しい都を夢見て、四人は「必ず外国へ行きましょう」と小学校五年の可愛い小指で誓いあった。吉野ミヨちゃん、田中春枝さんはアメリカ。岩田里子さんと私が欧州。浅草へ初めて観覧車を作った家庭の田中さんは矢張り一番早く、娘時代に夢を実現させた。

吉野さんは結婚してからアメリカへ。岩田さんは声学家となり、松平の姓に変わってイタリーへ。残念な事にイタリーで病死されたが——子供の夢だって、夢から現実には思づく事を私は知っている。

私の小さな胸の、大きな夢とは無関係に、東京の文化の向上は日に目覚ましく動き出していた。今迄男のかけかかれていた女性の存在にスポットがあたり、明るく浮

び上つて来た。殊に芸能界は一足飛びに他の道に先んじて、其の動きが華々しかった。この新しい息吹きを感じ始めた時、東洋軒も時代の流れにそつ先して、素晴らしい勢いで伸びて行った。御主人の伊藤さんも、社会の向上と共に育ち行く御自分の事業を眺め乍ら、それ故、余計にしっかりとハンドドルを握りしめ、一年、三百六十五日が足りない位の忙しきであった。実業界の人々との交流が目に見えて活発になり、東洋軒自体が伊藤さんと共に、大きく飛躍しようという活気ある地熱は、毎日、洋菓子と取り組んでいる夫の手に強く感じられ、その余波は小さな家庭に迄伝わり、食卓の話題も次第に進歩的になって来た。

一方、日本の表玄関の外交、政治も多忙を極め、各国名士の来日は東洋軒にも影響を及ぼし、それこそ国際的なものになって来た。

英国のコンノート殿下が御来朝になった折、天皇自ら東京駅へお出迎になつたが、その国賓へのお菓子を東洋軒で受け、夫は夢中になつてこのお菓子を作つたが、今でも忘れ難い良い思い出となつて残っている。

「おい、凄いでぞ！丸ノ内の帝劇の隣に、大きな素晴らしいレストランが出来るぞ」という夫のニュース。帝劇が従来の歌舞伎のような女形を使わず、名家の子女で高等教育のある新しい女優を採用して、日本の演劇界に新風を入れて話題をまいたが、建物も外国風に舞台ならぬステージの名を冠し、当時の日本を代表するように、国際的名称「帝國劇場」とし、桝や高土間は椅子席に変わり、引き幕はドンチョウとなり、花道のない欧風スタイルは、驚きの目を見張る程の大変化だったが、その劇場の隣接に地下道を作り

ともあれ、時代的に早進の資本事業と、いわゆる腕一本の昔乍らの事業を、両手に花と持ち乍ら、尚、古きを捨て新しきに進むか否かの別れ途に対し、あの偉大な伊藤さんは全身からの分別で、血を絞る、肉を削るの思いであった事と思う。遂に、二・三年後の御壽命となられた事を考え合せ、その頃小さな社会学しか持ち合せのなかつた私には計りしれない事であった。

東京会館が出来る頃、伊藤さんは、料理部から大平さんをお、そして菓子部より夫をフランスへ修業にやると洩らされた。私には無関係に思っていた東京の文化向上は、我が家を通り越さず、小さな我が家のかどぐちを叩き始めたのである。夫は、坂部甲次郎先生にフランス語の会話を、その他に独習書を求めて勉強し始めた。私は、長女の妙子を暖め、仏蘭西系の白百合幼稚園に入園させた。御風呂に子供を暖めるにも「一、二、三」に代つて「un, deux, trois」と、子供に覚えさせるだけでなく、私自身がフランス語に馴染みだいたいという思いからだった。こうして我が家も憧れのバリの空気が次第に入り込み、私共夫婦は陽気に「君が代」と共に「ラ・マルセイユーズ」を口ずさみ、我が家のフランス株は当るものなき勢で上昇し始めた。しかも夢でなく現実。夫のバリの菓子研究の船出に対するガソリンの供給者は、東京会館という油ではなかつた。御主人伊藤耕之進さんの嬉しいポケットマネーの油であった。

九円五十銭の原宿の我が家は、急に忙しくなつた。夫の妹は、私の着物と帯を並べては、夫の晴れの船出に私が横浜へ着て行く晴着を檢べる。

「色がわりなら何んだっていいわ」という私と、すべて儀

最高のレストラン「東京会館」が誕生すると云う。

星空にお堀をへだてて、美しい劇場と隣りあつた近代的レストランは、堀を線に新・旧文化の象徴のように誇らしく建つ事だろうと想像して見るだけで楽しい。伊藤さんの動きで、東洋軒と東京会館の経営関係のキイ・ポイントを伊藤さんが握られてるらしい気配も夫に感じられ、一つの明るい興奮した気分がみなぎつて来た。

事業にたずさわらぬ私には勿論良く判らないが、夫の出身地である大膳寮のあの懐かしい皇居の前で、洋菓子部を動かすようになるのかしら等と、そつと考えて見たりしてみる。

遂に東京会館も出来上り開館式が行われた。品のある入口の広間に大きなデコレーションケーキが夫の手によって作られた。夫にとりそれ迄の最大の製作品品だった。

ハンゴをかけて作られたこのお菓子は、私の目には東京会館、帝劇以上の美しさと誇らしきを感じた。真白なガラスの艶やかな甘い色、美しく飾られたデコレーションの中から、露のように光る銀玉の一つ、一つ、シャンデリヤに照らされて一段と映える真紅のジュワタンの上に、華やかな洋服姿の美しい人々の中に交り、私もひとときを洋行気分浸る事が出来た。しかし、東洋軒の理事だった夫は、東京会館の方の役につかず、今迄通り三田の本社で洋菓子部をしっかりと押さえていた。東京会館は資本営業、東洋軒の方は従前通り個人営業、其の頃の私には其の比較が言葉の字句にしかり判らなかつたが、今にして考え合せ御主人の伊藤さんが、事業の発展と共に起る複雑な悩みを、御自身の頭と、心で、戦つておられた事だろう。

式を心得てる義妹とは意見が喰い違ふが、私に対する心からの親切に感激して義妹にまかせた。饅頭のし紙の包みが積まれ、毎日私は祝金、祝品を楽しく整理する。虎の門のカバンヤから大小の立派な皮のカバンが届く。色は茶、夫の留守中私は、大きなカバンに紐をつけた。畳の上に平らにカバンを置き、それを船に見立てる。下に夏のゴザの座布団を敷き、上に薄い座布団を載せ、二才の長男國彦をおぶひ紐で軽く結ひつける。おむつがはずれ相に足をバタバタさせて喜ぶ。電車ごつこのように長くつけた紐の中に、長女の妙子を入れ、その先を私が持つ。女中のきくやが一番後を押さえ前から私が引くと後から押す。

横浜港は床の間。船の汽笛が「ポーッ」となり、ドラの音が「ゴン、ゴン」となれば皆で合唱する。はたの光り、歌うは私と女中のきくや、子供二人はすつかりはしゃいでリズムだけ「ワァー・ワァー」云つて真似をする。手を打ち振る可愛い妙子と國彦。

本先案内の私ときくやのイカリは、せまい座敷の波をけたてて走ります。船の名前も夫が予約した「加茂丸」私の生家の名と同じ、台所近く迄で一戻り、元の床の間迄来る。と今度は此処が「マルセイユ」大汗ダク／＼の四人の洋行ごっこ。マルセイユにはババが待っている筈。モットー、モットーとねだる子供達の声に、夕方を報せる豆腐屋のラッパの音が終りを告げさせます。

夜ともなれば夫の読む「Bon Jour」「Il fait beau temps」等の下手なフランス語も、知らない者同士笑う事もなく、フランス語が家中に溢れ、音となって流れて行く。(未完)

(門倉くら)